

## 第 1 講：56 「ゆうべはご苦労やった」

おやさと研究所長  
高見 宇造 Uzo Takami

この逸話は、昭和 6、7 年頃の板倉榎三郎氏に関する逸話である。氏は、信仰を咎められ丹波市分署に拘引された時、お道を離れようかと考え教祖にお会いした。すると教祖から、「ゆうべは、御苦労やったなあ」の一言があり、「これからはもう、かえって、何遍でも苦労しよう、という気になってしまった」と語ったというもの。氏の信仰人生の中で大きな意味を持っている。

本講では、その「苦労」に着目し、その意味を考えたものである。氏は、万延元年 2 月 18 日、河内国高安郡恩智村に板倉家の二男として誕生。板倉家は旧家で、代々農業を営む素封家であった。ゆえに、彼に将来を期待するところ大で、8 歳のころより 12 年間、習字、算術、漢学などの教育を受けている。

入信は 17 歳の時、兄亀造の瘰癧の病をたすけてほしいと「おぢば」に参詣したのが始まりである。心次第で、いかな自由もいただけると悟り、家族、親戚、地域の反対の中、信仰を始める。皮肉なことに兄の反対は厳しいものであったという。明治 21 年には教会本部の「派出員」を拜命し、本格的な御用が始まる。

## 【安堵事件】

明治 30 年、平安支教会の飯田岩治郎が異説を唱えた安堵事件では、教会本部は協議を重ね、免職したが、同年 11 月 25 日、「板倉榎三郎を担任教師と定め……」の「おさしづ」を伺い、氏が派出して治めている。それは反対派が襲いかかる中、命懸けのことであった。直ちに平安支教会長に就任したが当時は、「神様と神様の御道具の外は何一つとしてない」という有様だった。その中、残された信者を丹精し、神殿普請に取りかかり無事落成をしている。『道の友』は、これを「飯田氏不都合の所為あるを以て解職せられしより爾来板倉権大講義襲職して鋭意従来の弊習を改良し、布教の方針を一定し、日夜を分たず東西に奔走し、櫛風沐雨信徒を誘掖薫陶せしかば、感化の効不空、僅々一年に満たざる間に巨大の支教会を新築するの盛運に至りしは欽慕に堪へざるなり」と報じている。当時の教内で明るい話題となった。

## 【東北、北海道の道】

一派独立運動を受け、「教会所取締条規」(明治 35 年 7 月 29 日)が制定されると「第四教区 福島県・宮城県・秋田県・山形県・岩手県・青森県 第五教区・北海道」の担当になった。北海道、東北は遠隔の上、寒気は強く、交通不便であり、頑健が何よりの要件となっていた。また信仰の未開地であり、単独布教経験が求められたのである。当時、教会本部は、信者が定職に就かず教会で共同生活を営むことが世の中から咎められることに苦慮していた。そこでその説得に奔放し、「お前達だけの問題でなしに、お道全体の解散ということになるかもしれぬ。一時、旬の来るまでは捲かれて通って貰いたい……」と説いて回っている。

金平糖事件も一派独立運動の支障となったが、青森県の取締員として派出し、「目の前で分析してくれ」と迫っている。北海道では、信仰の育成に重点を置き、見込んだ者を徹底的に仕込むため、10 里 15 里の難路を櫓や馬で訪ねている。一方、東



北は、当時、教会はあったが、官憲の弾圧に悩んでおり、至る処の役所や警察を自ら訪問し、「不都合な点が御座いましたら遠慮なく御内報頂きたい」と心を遣っている。

## 【水口時代】

その後は教会本部の命により 53 歳で水口支教会長に就任している。当時水口は初代会長藤橋光治郎が出直し、後継予定者は未だ中学生であった。また多額の借財を抱え教会は消沈していた。当時、氏でなければ水口は治まらないという見方もあった。

着任に当たり、「教会長、教師の昇級取扱と役員任用範囲の拡張」に取り組み、人材の登用活用に意を尽くしている。一方で、説教に力を入れ、元の理を大衆の前で堂々と説いた。古事古典を引用し、時事問題を捕まえ、辛辣な言葉で聴衆を狂喜させている。役員、青年、婦人にまで、お話の稽古をするように仕込み、信仰に明るさを呼び戻していった。また質素儉約も励行し、借財返金を信仰の喜びとして説き、住み込み人の最低生活の保障も断行した。こうして遂に教会の復興を成し遂げている。

## 【死別の苦労】

このようにその苦労は一言で言えば、「出向いて治める」という派出の苦労であったと言えるが、一方では死別の苦労も経験している。これは辛いことだったと想像する。六男一女を授かったが、七男・知広氏以外は殆どが夭折している。その中、四男・茂春氏が 25 歳で出直したが、その落胆は大変なものだった。「俺は十七から道を聞き分け、只管道を思う一念で歩みつづけて四十六年、それこそ文字通り道一条。地場一条で戦い抜いて来た。それに子供運に恵まれず、次から次へと俺より先に出直して行く。今日までは因縁の通り返しと諦めても来たが、今度ばかりは助けて貰えると思っていた。神様もへつたくれもあるものか」と告白しているが、それも教祖のひながたを胸に、心を倒さず通り切り生涯を道の御用に勤めた。

「おさしづ」(刻限 22・3・21)には、「さあへ一代は一代の苦労を見よ。長々の苦労であった。二代は二代の苦労を見よ。」と言われる。板倉榎三郎氏は正に、初代の信仰者として、派出の御用に専念された生涯であったと思われる。今の言葉で言えば教団が組織化される途上の「想定外」のことばかりであったろう。最後に氏の信仰から学ぶことは布教伝道の上で実で大であることを指摘した。

なお講義に当たっては『板倉榎三郎伝』(田代澤治著、昭和 32 年、私家版)から多くを引用した。